

低額回答うちやぶれ

執念をもち

賃上げをねがふ春闘人



炭労春闘、山場は下旬

―十一日から三社集合交渉へ―
民間主要労組、スト背景に回答引き出す

今年の春闘を八四政策春闘と位置づけ、賃金二万四千三百五十円に要求書を提出し、四月十一日(六パーセント)、災害用慰金、日からの交渉に入っています。二千五百万円などの要求を二〇五、これに先立つ四月十日、炭労は

中央委員会をひらき、大会で確認した四社集合交渉から経営難を主張してあくまで集合交渉を拒否する住友資本の脱退を確認し、三社(三井、三菱、太平洋)先行の集合交渉で十一日から交渉に入ることを決めました。

主張

炭労の春闘は、いよいよヤマ場を迎えようとしている。すでにJOC(金属労協)の回答が出され一発回答で妥結。八四春闘での相場を背景に十二日早朝、前年をわずかにこえる額で妥結した。前年の水準を突破したとはいえない低

人並みの賃上げを

額回答であることには変わりはない。炭鉱労働者の数は減少し、慢性的な人員不足は労働強化となり、それは保安確保の面でも重大な影響を与えている。石炭産業の場合、前年は一方当たり百七十五円(二・四パーセント)という低額で、世間の相場(妥結平均四・四パーセント)から大きくかけはなれた妥結に終わっている。その結果、人並みはおろか他産業との格差は拡大し、生活は一だんと厳しさを増している。ばんでいるのである。

石炭資本は、石油の値下がりや輸入炭の値下がりなどによる炭価「春闘の危機」とさえいわれて凍結、さらにはユーザー(鉄鋼・セメント)などの不況を理由に、各社の経理事情の悪化を前面に押し出して、低額回答をせよと強いる。炭鉱労働者の賃上げの要求にこたえ、炭鉱資本の低額回答の意図を打ち破り、せめて人並みの賃金を獲得するために、全力をあげよう。

大牟田で春闘決起集会



84春闘勝利をめざす大牟田地区決起集会(写真)は、3月31日労働福祉会館で大田 薫氏を迎えて開かれ、荒尾地区は4月6日に開かれました。



発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市入船町1番地
電話(53)3033-4
編集兼
発行人 杉本 一男
半年間 1,200円 送料共
振替口座番号
労金大牟田
0968946-005

ふとる税
ほそる福祉へ
怒りの春闘

資料 10年間の春闘実績

年度	要求額 (日)	妥結額 (日)	妥結額 (月)	妥結率
1974	2,550円	1,400円	28,981円	32.9%
1975	1,800	565	15,279	13.1
1976	1,320	392	11,596	8.8
1977	760	458	12,536	8.8
1978	650	168	9,218	5.9
1979	400	150	9,959	6.0
1980	470	320	11,679	6.7
1981	730	445	14,037	7.7
1982	680	444	12,897	6.3
1983	490	175	5,060	2.4
1984	430	?	?	?

◎ 妥結月額には能率上昇分(昨年は1.2851)が乗じられている。標準出勤人数は22.5。
◎ 妥結率は少数点2位以下を4捨5入。

執行部が入坑点検

三池労組では次のような日程で各鉱の保安点検を実施しました。
四月十二日 四山鉱
本層西六十号、上層西三十五号
四月十三日 三川鉱
第二上層西七十二号、七十五号
上層西七十号、本層西八十号
四月十四日 有明鉱
第二上層西五十号、本層東十号
十九日の参議院エネルギー特別委員会、二十日の石炭特別委員会
で有明鉱災害について森田組合長が参考人として意見を述べます。

春闘情宣集会開く

四月五日から十日にかけて各職場分会ごとに執行部による情宣集会を開きました。

両院で有明鉱災害

▼桜の花も終わった。花見酒に歌とケンカはつきものというが、グループごとに持ち込まれるマイクやカラオケで一段と騒々しいことだったろう。外国人は浮かれ騒ぐ日本の花見をニュースで見て働くばかりでなく遊ぶこともあつたのだと安心したとか。

地底

▼有明鉱大災害に関連すると思われる人事異動があつた。災害について会社が責任を明らかにしたという話はいそがしく聞かぬが、県警と鉱山保安監督局の刑事訴訟は間違いない。災害原因もきわめて明白であり、三十八年の三川鉱大災害のように原因不確定による不起訴などありようもない。

▼軍拡と福祉破壊の五十九年度予算が成立した。国民総犠牲を強いる予算のもとでまた新たな苦しみを増幅させる旅立ち……深いため息が出る。後半国会の焦点は健保などの重要法案に移るが、健保では社・共が「撤回を迫る」のをはじめ野党は対決姿勢。ちよっぴりの賃上げを「にしないため」にも成立阻止へ全力だ。

▼JOC(金属労協)の回答は、電機を除き額ではわずかに上がったもののアップ率では昨年実績を下まわった。財界は「低成長下のベアが定着した」と歓迎、やっぱリストなしでは弱い……ということを見せつけた。私鉄も早期妥結だったが、ストを背景にようやく五パーセント台に近づいた。しかし「百玉の争い」では足りない。

▼炭鉱の回答は、例によってゼロからの出発。交渉はあつても前進せず。今年の春闘は前年実績プラスアルファからの出発のはずであり、五パーセント台乗せが事実上の課題。それにしても炭鉱資本は労働者をなめきつたものだ。「人並み」「他産業並み」というものの控え目な要求。これ以上の辛抱は断じてお断りだ。